主日礼拝　２０２１年２月２１日（日）
題　『憐みの主イエス』
テキスト：マルコによる福音書１章：４０～４５節

教会の暦では今年は今週２月１７日（水）からレントに入ります。レントは四旬節とも受難節ともいわれます。復活の希望を持ちつつ、イエス・キリストの十字架に至る苦難の姿を覚える期間です。復活日（イースター）の前の６回の日曜を除いた４０日間とされています。起源は２世紀ごろだといわれます。ちなみにイエスさまの復活日イースターは､｢春分を過ぎて最初に訪れる満月の、直後の日曜日」と定められ、今年はイースターが４月４日です。今年のレントは２月１７日から ４ 月３日までです。この時期、主の復活の希望を持ちつつ、十字架の道を歩まれた主イエスの苦難の中に示された神さまの恵みを共に味わいつつ、自らの言葉や行動を見つめ直しながら過ごしたいと願っています。

今日の聖書の個所には、ガリラヤ地域を宣教で巡回しておられた主イエスが重い皮膚病を患っている人をいやすされた場面が記されています。
以前、用いられていた口語訳聖書では「重い皮膚病」は「らい病」と訳されていました。この病気は、約２０００年前には、汚れた病であり汚れた霊、悪霊の業であると信じられ、怖れられていました。医療の進んでいない時代のことでもあり、映画などの影響もあり、人類の歴史では過剰に怖れられ人々の中に差別を生み出して行った歴史があります。
この「らい病」という言葉は、今日この病気の歴史的な説明をする時以外は使われません。差別用語となっています。新共同訳聖書から「重い皮膚病」と訳されています。今日では「ハンセン病」といわれます。ノルウェーの医師、ハンセンという人が、1873 年にこの「らい菌」を発見しました。そこからこのハンセン病という名前となって行ったのです。

ちなみに今日、この「らい菌」の感染力は医学的に極めて弱いと言われ、有効な薬もできているのです。治療さえ受ければ、恐れることのない病気なのです。

２０００年前の時代、治療を受けなければ皮膚が痛んでくることのある病気で人々に怖がられ、病人は家族から離れ、地域での生活は出来ず、村の外に隔離されていたのです。日本でも怖れられ、国により強制隔離の法律ができ、日本各地の島に療養所が作られて強制隔離が行われて来ました。

強制隔離は日本では 1996 年まで続きました。２５年前のことです。これよりかなり以前に治療薬もすでにあったのに、日本の政府は強制隔離政策を続けて来たのです、他の先進国に比べて強制隔離を止めることが遅く、患者の方々

や家族に対する差別が長く続く原因となりました。そのことを日本政府もやっと認め、患者の人たちに正式に謝罪したことは皆さんもご存じだと思います。

わたしも以前働いていた明石教会でも差別への取り組みや、以前倉敷にいた時、瀬戸内海の長島にあり邑久光明園家族教会へ度々、奉仕でいく機会があり元ハンセン病患者の方々との出会いの中で、それまでは知らなかった患者の方々の苦しみの歴史を学ばされたのでした。歴史を知るということは大切です。ある人は「知らないことは罪である。」とも言いました。「知ろうとしないことが罪」なのだと思います。歴史を学ぶことが大切なのです。また訪問した療養所の信徒の方々の礼拝や祈り会での心からの祈りや、賛美の力強さに圧倒され、度々心揺さぶられ、恵みを頂いたことを思い出します。「続神の家族～光明園家族教会の１００年」という記念誌が発行されています。

共に今日のみことばに耳を傾けましょう。

40:さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。

当時の常識では、この人は、村はずれに住んでおり、外に出ることは許されませんでした。人の所に来ることはできず、赦されず、反社会的行為とみなされていたのです。噂で聞いたイエスの元に来るということの中にこの人の切実さを思います。

この人の願いは、「癒してください、助けてください。」との切なる叫びです。

イエスさま「助けてください。あなたならできます。できるはずです。」との強い思いです。

それに対して、

41:イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、42:たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。とあります。驚くべきことが起こったのです。

イエスは「憐れまれたのです。」。「憐れむ」とは、「同情する」とかの言葉と似ていますが。ここで使われている「憐れむ」という言葉は、新約聖書の原語のギリシア語では、人の「内臓」を、腸や肝臓や腎臓のことを表している言葉なのです。つまり、ここでイエスさまは「はらわたを突き動かされ」「はらわたがちぎれる」ほどの思いになられたというのです。イエスさまにとってはそれほどの衝撃だったのです。

主イエスは、すかさず「「よろしい。清くなれ」と言われたのです。これはイエスさまの「もちろんだ！わたしの心だ。」という強い激しい思いが溢れ出したことばだと受けとめます。

イエスさまは、その人の苦悩や重荷をそのまま担われるのです。これ以後、まさに苦悩の十字架の道、人の苦しみを担い、罪を贖う十字架への道、救いと解放への道を進まれるのです。

43:イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、

44:言われた。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。」と言われます。この病が治癒したことは、当時の律法、規則では清めの献金を捧げること、そして祭司の証明が必要だったのです。イエスさまは、この人が家に帰ること、そして家族以外の人とのつながりを持つことを願われたのだと思うのです。どんな人にも必要なことではないでしょうか。

ただ、この後、この人がとった行動、

「 45:しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。」。それほど、彼はうれしかったのでしょう。

しかし、主イエスはこの人が語った言葉と行動により、もはや公然と町に入ることができなくなったのです。町の人が多く集まってくることは、それまで町を治めていた権力をもっていた人たちには脅威だったのです。

マルコ福音書を読んで行けば、人が救われ、解放されればされる程、反対に、主イエスの苦悩は深まり、十字架への道は近くなったように思えます。

イエスを求める人の心には、純粋なものもありますが、そこにはわたしも他人ごとではないのですが、罪（神に背く自己中心的な願望）欲望、期待、甘え、依存などもあるように思います。これ以後、イエスは町の外の人のいない所におられたのです。それでも、人々は四方からイエスのところに集まって来ました。　主イエスの心は「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来ないさい。休ませてあげよう。」マタイによる福音書１１章２８節に記されています。人の苦悩を背負って神の子イエスはただ一人十字架の道を歩まれたのです。しかし、神は最後までイエスと共におられたのです。神の救いの奥深さを思わされます。

今日の聖書の学びから、人間の救いと解放を感謝すると共に、わたしを含めて、人はイエスさまの心をどれほど知っているだろうかと思わされました。

確かに、主イエスはわたしたちの罪のために命を捨ててくださったと頭を垂れるしかないのだと思います。

レントの時期、主の復活の希望を持ちつつ、十字架の道を歩まれた主イエスの苦難の中に示された神さまの恵みを共に味わって感謝しながら、自らの言葉や行動を少しでも見つめ直しながら過ごせればと願っています。

◆重い皮膚病を患っている人をいやす

40:さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。

41:イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、

42:たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。

43:イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、

44:言われた。「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。」

45:しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入ることができず、町の外の人のいない所におられた。それでも、人々は四方からイエスのところに集まって来た。